

# ESSAY いたずら

倉元信行

16

## “志野”のとっくり

セラミックスの勉強のため、31才の時に無機材質研究所に派遣されたことは前に書いた。ここでいうセラミックスは普通の陶磁器ではなく、高度の性能を発揮するファインセラミックスと呼ばれているものである。

この分野の知識が全く無くて派遣された私には、研究者の話がちんぷんかんぷんだった。用語が理解できないのである。

土浦駅前の書店に行き、何冊かの本と辞典のようなものを買って読み始めた。

それと同時に、せっかくセラミックスの世界に足を踏み入れたのだから今まで全く関心の無かった陶磁器の方もちょっと触ってみようかと思いついた。

酒が好きだから“くい呑み”でも買ってみようかと近くの焼き物の町、益子に出かけ安物をあさったのがきっかけとなった。

私は焼き物の魅力にとりつかれた。

くい呑みやとっくりなどを始めとする色々な焼き物に接するのは、その後の生活の大切な部分を占めるようになっていった。何度もくり返し訪れた、萩、備前、美濃などの窯元めぐり、それに各地の美術館やデパートでの個展など、焼き物を楽しむ機会はその気になればいくらでもあった。

藤沢の研究所に転勤になった時、私の住んでいる同じ相模原市内に会社の独身寮があり、その近くに寮生が毎日のように通う“松が家”という飲み屋があった。

寮生で、この“さっちゃん”に迷惑を掛けなかったものはいない。

飲むことに全てを賭けているような寮生たちは、ここで大酒をくらって好き勝手なことを言い、向こう見ずな行動をしたりしては結局さっちゃんに厳しいお説教をされるのである。

私もちょくちょく顔を出していた。手作りの料理がおいしかった。

私の買い集めたい呑みは、このカウンターの上のザルに盛られていた。

さっちゃんの目に適った常連さんだけが、この中から自分の一個を決め占有することができるのである。寮生は常連であっても確かもらえなかったという記憶がある。

八年ほど前、惜しまれながらこの“松が家”が店を畳んだ時には、それぞれの常連さんは自分のくい呑みを持ち帰った。

もしかしら、今でも愛用されているものがあるのかも知れない。

私自身が焼き物づくりに取り組んだのは7年前、45才の時である。藤沢の研究所の近くにある陶芸教室を覗いたのがきっかけだった。

いきなり、私は“志野”に挑戦してみようと思った。

初めて益子を訪ねてから10余年、たくさんの焼き物を見、そして触れてきた。

そして酒を飲むなら“志野”か“萩”というのが私自身の結論であった。

お茶についてもそうだと思っている。

志野は桃山時代に始まった長石の釉をかけた日本独自の焼き物で、少し厚めにかけた釉肌は白くてあたたかな独特の風合いを持っている。

下地に鉄や紅土で化粧をすれば鼠志野や紅志野にも変化する。



長年、たくさんの焼き物に触れてきて、自分なりの焼き物に対する感覚を磨いてきたつもりだった。今度は、それを自分自身の手で表現してみたいと思った。

東急ハンズで買って来た紅土を志野釉に混ぜ込み自分の釉を調合した。そしてたかさんの“くい呑み”と“とっくり”を造ってみた。

この中の一つをコンテストに出してみたのである。新聞で見つけた“全日本アマチュア陶芸コンテスト”というものであった。

産経新聞社などが主催するこのコンテストは、独特の審査方式を採用している。

陶芸家でもある池田満寿夫氏、依藤子さん、東京芸大の先生などがデパートに並べられたすべての作品を見、手にとって点数を入れる公開審査なのである。

残念ながら、当日、審査会場には行けなかった。

社外の友人3人と、苗場にある法政大学のH教授のロッジに泊まり込み、毎年恒例のスキーを楽しんでいたからである。

リフトの上で、いまごろ審査をやっているはずだと、私は会場の風景を想像してみたりしていた。

なかなか作品が返ってこないので事務局に電話を入れた。

そして私の応募した“鼠志野”のとっくりが、新人賞をもらっていたことを知らされたのである。

自分が良い出来だと思った作品が評価され、素直にうれしいと思った。

このとっくりを手にとったであろう、池田満寿夫氏も不慮の事故で世を去った。

私は焼き物のオブジェにはあまり興味が無いのだが、氏の個展を見て、萩の三輪龍作氏と並んでこの世界では、一つ突き抜けたものが在ると感じていた。